



小島信夫
庄野潤三
集



現代日本の文壇

小島信夫 庄野潤三

〈監修委員〉

伊藤 整

井上 靖

川端 康成

三島由紀夫

〈編集委員〉

足立 卷一

奥野 健男

尾崎 秀樹

北 杜夫

(五十音順)

学習研究社

現代日本の文学

44

小島信夫集
庄野潤三

全50巻

分割払価格 39,000円

現金価格 35,500円

昭和46年5月1日 初版発行

昭和48年5月1日 八版発行

著者 小島信夫
庄野潤三

発行者 古岡秀人

発行所 株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5

郵便番号 145 振替東京142900

電話 東京(720)1111 (大代表)

印刷 大日本印刷株式会社

中央精版印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

表紙クロス 東洋クロス株式会社

製函 日本紙パルプ商事株式会社

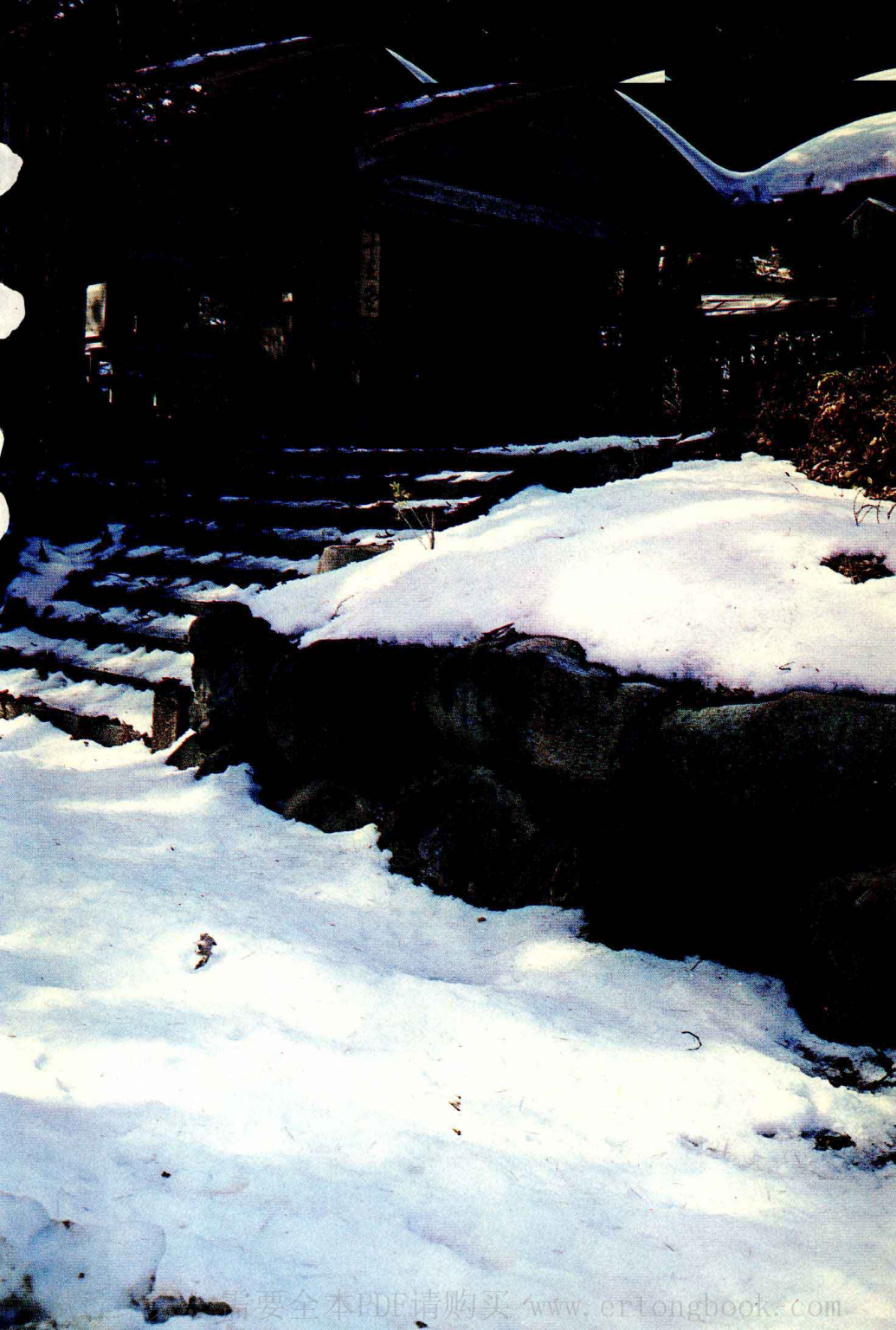
*この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、
文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145) 学研
「ユーザー・サービス本部事務局」現代日本の文学係へ、
電話は、東京(03) 720-1111 内線352,353か、東京(03)
727-1600へお願いします。

小島信夫文学紀行

飛騨・高山の大雄寺山門



スッキリした山門がなつかしいと妻の小夜子（こよこ）がいうので、立寄って見ることに一決し、市の中の宿に泊り翌朝階段をのぼって行くと、右手に新しい立札が立っていて「山門不幸」と記し、その左の部分に某主人と附記してある。これを書いたのがその主人であるばかりでなく、山門とはこの門のことというよりは寺ぜんたいのことなのだから、何か不幸があったら寺ぜんたいが不幸になる。山門不幸とは、寺の不幸を意味する。山門不幸とは、寺の不幸を意味する。山門不幸とは、寺の不幸を意味する。



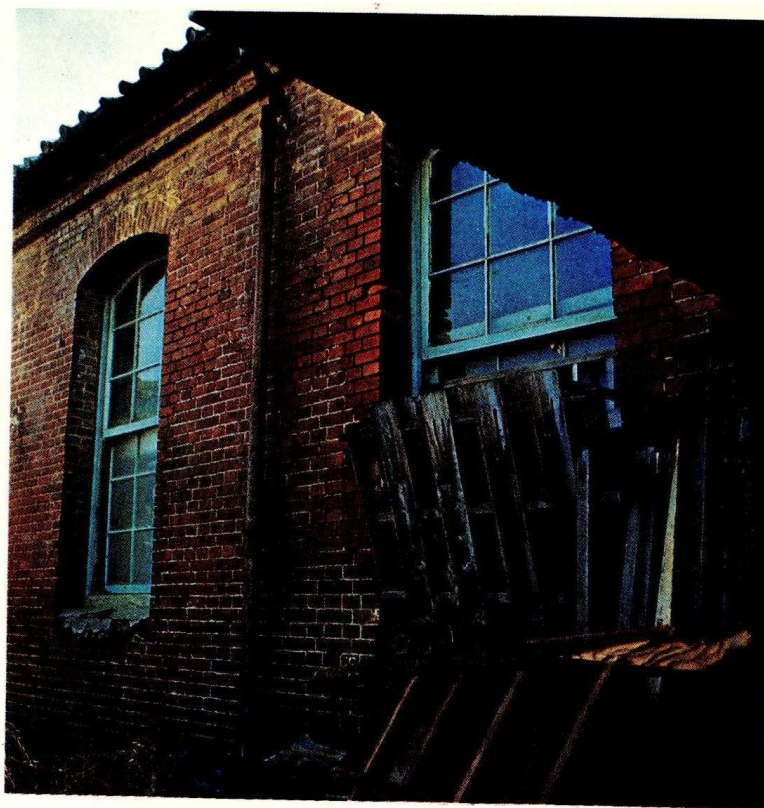


右 そのあと、飛驒民族館へきた。……あとは食事をして、あれとあれを見て、そのあと小高い山の上にあるはずの千光寺へ行き、胸つき八丁を駆け上がりざま立木にハシゴをかけて仁王を刻んだという円空の彫刻を見て、もともと嵯峨天皇の……（「山門不幸」）
飛驒・高山の千光寺山門

上 それからあとわしは便所の掃除、納屋や庭の掃除をしてまわり野宿をし、乞われれば軒の下に寝させてもらっておるうちに、いつしよにいつしよにという衆が集まり、頼みもせんのに、十人になり二十人になり、人が家をくれ、頼みもせんのにここに土地を人がくれ、頼みもせんのに人がふえ、そのうち一世が出来、

……（「十字街頭」）

京都・山科の燈園



上 銃把をにぎりしめると、私の存在がたしかめられた。そこから生命が私の方へ流れてくるように思われた。銃把は女がみごもる前の腰をおもいおこさせた。私はかなしみをこめてその細い三八銃の腰をにぎりしめた。いたいいたい慎ちゃんやめて、むりよ。私にはそういう声ができこえるようだった。私はあたえることの出来なかった臂力を小銃にむけた。

（小銃）

昭和十七年二月、信夫が入隊した、岐阜の中部第四部隊（68連隊）の炊事場

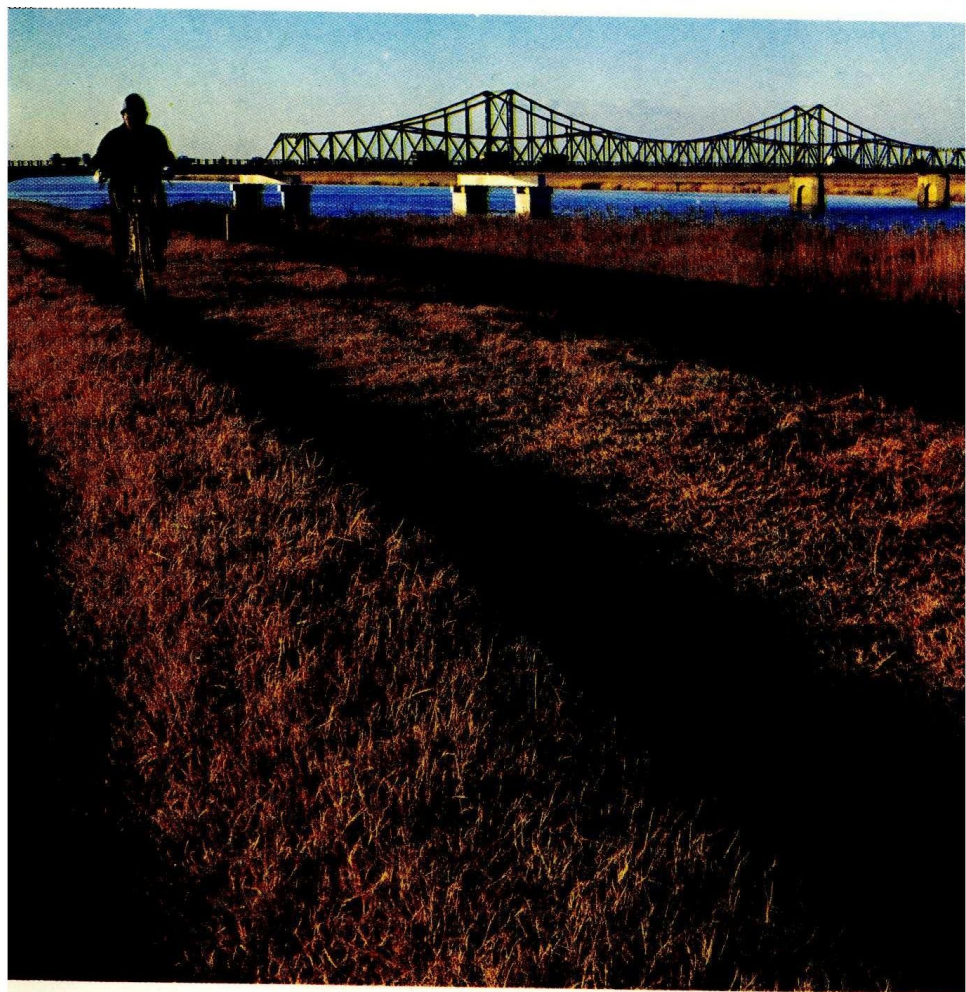
左 そこからアメリカン・スクールの生徒たちが遊んでいるのが見えた。小学校、中学校の男女の生徒が、色とりどりの服装で、セーター一枚か、うすいシャツの上にジャンパーだけで動いている。伊佐はそこを離れて建物のかげから、なおものぞいていた。

（「アメリカン・スクール」）

アメリカン・スクールの近くの公園にて







右

満子の書簡

お別れの日の丘の上で
 「どうして僕が消え失
 せてはいけないの」と
 分りきったことをきい
 たりなどして「ではな
 ぜあんなにまで私を愛
 したの」とおききした
 くなる。……もう私は
 何も考えません。……
 現に今朝は小さい人を
 連れて用事で一寸出て
 それから、勉強とお洗
 濯をしました。

〔「女流」〕

作品舞台、成城学園

上　もう六、七年にも
 なるが、その頃私は田
 舎都市のある会社に勤
 めていた。私はその町
 まで三里のあいだ堤防
 づたいに自転車に乗っ
 て通っていた。〔「鬼」〕
 利根川堤防と水郷大
 橋



加納真一さん、あなたは新しい奥さんと、午前中の子供のいない時に、よく家から逃
出すように雑木林へ散歩に出かけますね。これで三度目ですね。

東京・国分寺市の雑木林

（「疎林への道」）

庄野潤三文学紀行

佐渡・金北山(標高1,173m)の眺望



「こっちの大佐渡は国定公園になっていて、小佐渡は一部だけ国定公園に指定されています。大佐渡の絶頂には金北山というのがあんのさ。国立公園は厚生省の援助があるが、国定公園には援助がない。県知事が管理しているんです。……」

(「佐渡」)

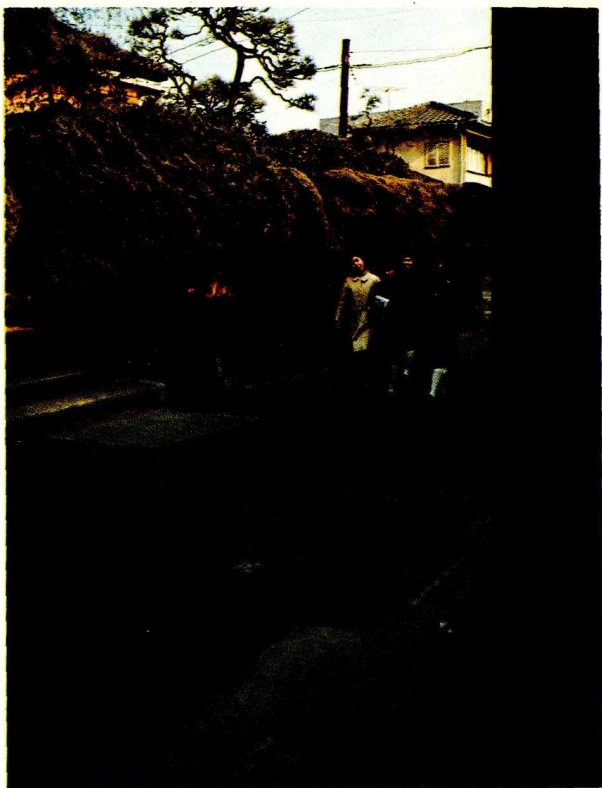
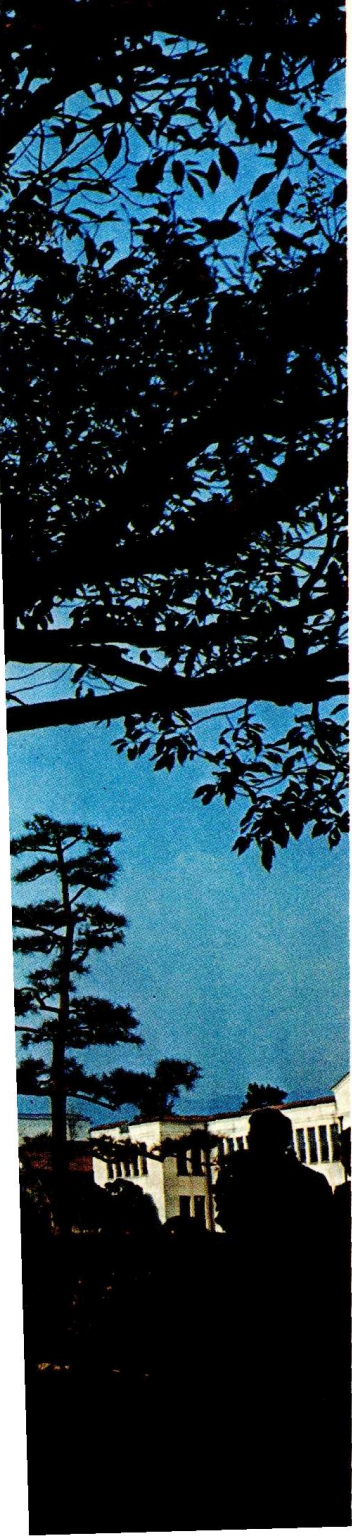


大佐渡の眺望



行ってみて、手紙をくれたお爺さんおじいさんに会えればよし、会えなければそれでもいい。とも角、これまで考えたこともなかった佐渡という島と私との間に、幻の橋がかかった。それは、あると思えばある、無いと思えば無い、頼りない橋だけれども、ひとつ、この橋を渡ってみることにしてはどうか。

(「佐渡」)



てつかやま
大阪・帝塚山住宅街

上 あたしは特別無邪気な性質の女学生だったので、立上先生が突然ある日から女ばかりのあたし達の家庭の中へ入って来たことに対して、最初はちょっと奇異の感じを抱いたけれども、それもすぐに消えてしまった。 (「黒い牧師」)

左 まがら
真柄涼子が沼四郎の前に現れたのは、彼が阪神間の私学として知られているその大学の四年に進んだ四月の始め——昭和二十五年のことである。 (「流木」)

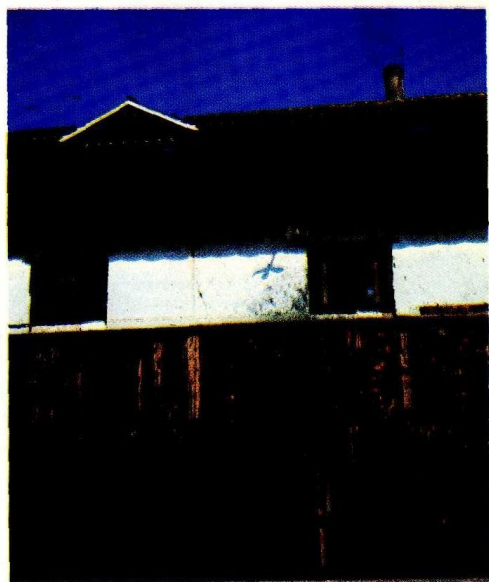




香川県・小豆島

右 それから彼は宿屋から近くの醤油会社へ電話をかけて、機械のついた漁船を急いで一艘用意してもらおうように頼み、更に警察へ遭難を知らせ、付近海岸からの搜索を求めた。上 その年の夏、八月中旬に劇研究会は小豆島へ恒例の地方公演に出かけた。一行は二十四人で、そのうち女子部員が四人、真柄涼子もそのうちの一人であった。

(「流木」)



小豆島・内海湾東岸近くの醤油会社